

オンラインによる交流型日本語短期プログラムの試行

— ICT を活用した協働学習の有効性 —

栗田奈美・志賀里美・小野里恵・上原真知子・島崎英香

The First Trial of Online Short-term Japanese Program focusing on Interactions of Participants: The Effectiveness of Peer Learning using ICT

Nami Kurita, Satomi Shiga, Megumi Onozato,
Machiko Uehara, Hideka Shimazaki

要旨

恵泉女学園大学では、毎年実施していた交流型日本語短期プログラムを、2020年度はオンラインで実施することとした。プログラムのオンライン化に際し、課題となったのは、(1) 従来のような異文化理解や、授業に参加する学生ボランティアとの交流が期待できるのか、(2) PCの画面を通していても学習者の主体的な学びが達成できるのか、という2点である。本研究では、これらの課題に対する具体的な取り組みとその成果を報告する。取り組みは、(1) 日本文化を通して学ぶ日本語、(2) 視覚・視聴覚資料による導入、(3) ICTの活用の3点で、それぞれについて大きな成果が見られ、それがプログラムに対する肯定的評価につながったことが終了時のアンケートから窺えた。さらに、オンラインならではのICTの活用と、本プログラムの特徴である学生ボランティアの参加により、異文化理解や学生間交流にとどまらず、学習者と学生ボランティアの主体的な協働学習が可能になったことを主張する。本研究の結果から、オンラインプログラムの有効性が示唆されたと言える。

キーワード：オンライン・協働学習・日本語短期プログラム・ICT・学生ボ

ランティア

Key Words : Online, Peer learning, Short-term Japanese Program, ICT, Student Volunteers

1. はじめに

恵泉女学園大学では、2011年度より、毎年夏季休暇中に中国、韓国、台湾、タイなどの協定校から来日した日本語学習者を対象に、約2週間の日本語短期プログラムを実施している。このプログラムは、午前中に日本語と日本事情に関する授業を行い、午後は様々な文化体験や見学、観光ができるスケジュールとなっており、「日本語をシャワーのように浴びる」ことをコンセプトとしている。そのために、授業や文化体験には恵泉女学園大学所属の学生がボランティアとして参加しているが、学習者1, 2名に対し、学生ボランティア1名が配置され、同世代の生の日本語に、まさに浴びるように触れられるデザインとなっている。このように、本プログラムの最大の特徴は「学習者と学生ボランティアが異文化理解を通して、共に学び合う交流型短期プログラムである（秋元他2020: 18）」という点である。

だが、2020年度は新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、このプログラムも中止を余儀なくされた。しかしながら、協定校（韓国聖公会大学）からの要望もあり、コンセプトはそのままに、オンラインによる「恵泉ウィンタープログラム」として実施することになった。つまり、来日が叶わないオンライン下での日本語・日本文化紹介プログラムを、新たに立ち上げるようになったのである。ここで大きな課題となったのは、オンラインという制限のある学習環境で、従来のような異文化理解や学生ボランティアとの交流が期待できるのか、また、PCの画面を通していても学習者の主体的な学びが達成できるのか、という点である。

2020年以降、様々な機関でオンラインによる日本語教育が試みられ、長谷川他（2021）、久保・奥村（2021）、許・謝（2021）等、その研究成果も蓄積されつつある。しかしながら、オンラインに特化した日本語短期プログラムに関する研究は数少ない。

そこで、本研究では、上記の課題に対する具体的な取り組みとその成果を報告する。さらに、オンラインならではのICTの活用と学生ボランティア

の参加により、文化理解や学生間交流にとどまらず、学習者と学生ボランティアの主体的な協働学習をも可能とした、オンラインプログラムの有効性を主張する。

次章では、まずプログラムの概要を紹介し、第3章ではオンライン化に伴う新しい試みの紹介、続く第4章ではその実践例と成果について報告する。第5章ではプログラム終了時に実施したアンケート調査の結果を提示する。第6章はまとめである。

2. プログラムの概要

「2020年度恵泉ウィンタープログラム」は、2021年2月15日（月）から26日（金）までの2週間にわたり、韓国聖公会大学の日本語学習者36名（男性7名、女性29名）を対象に、Zoomを利用したオンライン方式で実施した。クラス編成は、上級（10名）、中級（13名）、初級（13名）の3クラスである。対面で実施していた従来の短期プログラムでは、来日後の筆記試験やインタビュー形式のプレイメントテストが可能であったが、今回は、事前に送付を依頼した紙面による日本語力調査（作文を含む）だけをもとに、クラス編成を行った。

授業時間は1日2コマ（1コマ50分）で、1時限目に日本社会・文化紹介、2時限目に日本語の授業を実施した。総時間数は16時間である。従来の対面プログラムでは1日3コマの授業を実施していたが、今回はオンライン授業ということで、PCの画面を通して受講する学習者の負担を考慮し、2コマの設定とした。

授業に参加する学生ボランティアは計45名、延べ231名であった。学生ボランティアには、日本語教員養成課程を履修している学生や日本語日本文化学科の学生のみならず、国際交流や韓国語・韓国文化に関心を持つ学生など、全学からの参加を得ることができた。また、従来同様、学生ボランティアには事前に説明会を開き、プログラムのコンセプトや参加の心構え等について説明を行った。

以上のように、プログラム全体のコンセプトは従来と変わらないものの、授業形態や総授業時間数の変更により、コースデザインに際しては新しい試みを数多く取り入れることとなった。次章では、その試みを紹介する。

3. オンライン化に伴う新しい試み

本章では、交流型日本語短期プログラムのオンライン化に伴い、新しく取り入れた試みを、(1) 日本文化を通して学ぶ日本語、(2) 視覚・視聴覚資料による導入、(3) ICT の活用の3つの観点から紹介する。

3.1 日本文化を通して学ぶ日本語

従来は、プログラム用に開発した教科書を使用し、文化理解のための日本語の導入、文化紹介・活動、まとめという順序で日本語・日本文化の授業を行っていた。しかし、今回は総授業時間数が少なくなったこともあり、まずは学習者にとっても関心の高い文化紹介から始め、動機づけを与えた上で日本語の導入をするという文化紹介先行のカリキュラムに変更した。

授業で扱う文化トピックは、学習者にとって関心が高いと思われる、和食、音楽、アニメ、ファッション、観光、伝統文化、年中行事の7つのトピックとした。これらのトピックの導入に際しては、教科書に縛られることなく、クラスのレベルに応じ、生教材を含む様々な教材や作成教材を使用することとした。

3.2 視覚・視聴覚資料による導入

従来の来日型プログラムでは、箱根や横浜への日帰り観光を始め、博物館見学、歌舞伎に関する講演、抜刀体験、盆踊り体験等、日本文化・社会に触れる様々な活動をカリキュラムに組み込んでいた。今回は、それらの体験型活動が不可能なため、画像や動画等の視覚・視聴覚資料を活用し、視覚を通して少しでも日本文化や現在の日本社会が理解できるよう工夫した。

実際に使用した視覚・視聴覚資料としては、国際交流基金による「ひろがるもっといろんな日本と日本語」や「まるごと+(プラス)」、「エリンが挑戦! にほんごできます。」等の日本語教育に特化した映像教材を始め、一般に公開され、日本人が視聴している動画(You Tube 等)を生教材として使用した。

3.3 ICT の活用

オンラインプログラム最大の利点としては、ICT の活用が挙げられる。恵泉女学園大学で実施している通常のオンライン授業では Web 会議ツールで

ある Zoom を利用しているため、本プログラムにも Zoom を採用した。Zoom の特徴は「ブレイクアウトルーム」機能を有する点である。この機能を利用することで、対面同様とはいかないまでも、学習者と学生ボランティアの交流の場を設けることができるのではないかと考えた。なお、学習者もオンライン授業には習熟している学生が多かったが、事前に2度の「接続テスト」を実施し、Zoom の使用が可能かどうか確認する機会を作った。

また、恵泉女学園大学では授業プラットフォームとして Google Classroom を利用している。在学生は全員アカウントを所有しているため、本プログラムでも学生ボランティアと教員間の連絡ツールとして、Google Classroom を利用することとした。

次章では、これら3つの試みの実践報告ならびにその成果について述べる。

4. 新しい試みの成果

本章では、前述した3つの試みのそれぞれについて具体的な実践例を紹介するとともに、どのような成果が見られたかを検証する。

4.1 試み1「日本文化を通して学ぶ日本語」の実践例と成果

4.1.1 実践例

授業では、3.1に示した7つのトピックを1日1つずつ扱い、最終日にはクラスごとにまとめとして発表を行った。トピックは初級、中級、上級の3クラスとも共通していたが、映像視聴や活動はレベルに応じて行い、日本語学習項目は活動に合わせて設定した。「伝統文化」の回を例にとると、表1のようになる。

いずれも学習者が学生ボランティアと共に学ぶ活動となっている点が特徴である。また、日本語学習項目は、活動の種類により、活動の途中あるいはまとめとして最後になど、柔軟に導入、確認を行った。

表1 「伝統文化」に関するクラス別日本語・日本文化授業

クラス	日本文化紹介・活動	日本語学習項目
上級	大学の居合道部の練習動画を紹介した後、オンラインでできる手遊びの説明を学生ボランティアと一緒にグループで考える。	条件「たら」 ・勝ったら指さします
中級	「ひろがる」の武道の映像を視聴後、グループで学生ボランティアとお互いに伝統文化を紹介し合い、最後に自国の伝統文化についてスピーチをする。	N1はN2として有名です N1はN2に/と似ています
初級	「まるごと+(プラス)」の伝統文化関連の映像を視聴後、学生ボランティアが先生役となり、折り紙体験を行う。	【語彙中心】折ります 位置(上下左右)、裏、同じ、こうします

4.1.2 成果

日本語教授先行から日本文化紹介先行へのカリキュラム変更による利点は、導入時に学習者の興味を引き、より深く学びたいという動機づけを喚起できたことが大きい。例えば、上級クラスの「伝統文化」導入では、動画による居合道の紹介後、ペンを刀に見立てて画面越しにそれぞれが素振りを行った。ともすると停滞しがちなオンライン授業であるが、学習者と学生ボランティア、そして教師とが同時に同じ活動をすることで一体感が生じ、活気あるクラス活動となり、さらには高い動機づけを保ったまま、その後にく日本語学習へもスムーズに移行することができた。

また、身近で親しみやすい文化トピックに基づく活動から授業を構成したことで、日本語専攻以外の学生ボランティアや日本語教員養成課程未履修の学生ボランティアにとっては授業参加に対する心的なハードルが下がり、積極的に活動に参加できるようになった。その結果、学習者と学生ボランティアの間の交流も促進されたと考えられる。

以上述べてきたように、オンラインの、しかも従来より限られた授業時間内で、学習者が関心を保ちながら効率的に日本語・日本文化を学ぶには、文化紹介先行のカリキュラムが適切であったと言える。

4.2 試み2「視覚・視聴覚資料による導入」の実践例と成果

4.2.1 実践例

4.1.1で提示した「伝統文化」紹介の授業においても、すべてのクラスで視覚・視聴覚資料による導入を行っていたが、ここでは、上級クラスが「和食」のトピックで行った「インスタ映えする葛湯」を一例として紹介する。活動の流れは以下の通りである。

- (1) 事前準備として、授業開始前に葛湯の画像を探しておくよう学生ボランティアに依頼する。
- (2) 授業の導入として伝統的な和菓子の動画を視聴し、クラス全体で、昨今の見た目を重視した「インスタ映えするスイーツ」との共通点を探す。
- (3) ブレイクアウトルームに分かれ、日本と韓国の「インスタ映えするスイーツ」を、画像を見せるなどして紹介し合う（学生ボランティアは事前に画像を準備済）。その後、メインセッションに戻り、他のグループの学生にも紹介する。
- (4) クラス全体で、片栗粉を使った葛湯の作り方の動画を視聴する。
- (5) 再びブレイクアウトルームに分かれ、自分で葛湯を作る場合、どのようなものを入れるか、また、どのようなトッピングを選ぶか等、「インスタ映えする葛湯」のアイデアを出し合う。その後、グループごとにオリジナルの葛湯プランを1つずつ考案する。
- (6) 再びメインセッションに戻り、その日の学習項目である「まず、次に、それから、最後に」を使い、各グループの葛湯プランを順序立ててわかりやすく説明する。
- (7) 授業終了後、各自片栗粉（コーンスターチ）やトッピングの材料を準備する。
- (8) 翌授業日の休憩時にそれぞれの自宅で葛湯を作り、できあがった葛湯をPCの画面を通してお互いに見せ合った後、「いただきます」の挨拶をして一緒に食べる。

下線で示した通り、導入時を始め、活動における複数の段階で、画像や動

画を積極的に利用していることがわかる。

4.2.2 成果

この活動では、「インスタ映えするスイーツ」と日本の伝統的な和菓子である「葛湯」がキーワードとなっているが、いずれも画像や映像なしでは紹介も理解も困難であろう。この点で、視覚・視聴覚資料による導入は非常に有効であったと考える。また、教師が準備した画像や映像だけでなく、学習者や学生ボランティア自らがスマートフォンで探した画像を利用し、その紹介を取り入れたことで、画像が発話の端緒となってお互いに会話をしやすい環境が作られた。さらに、「話し手は自分が紹介したい画像を見せながら相手に伝えたいことを伝え、聞き手も自分が聞きたいことを聞く」という、会話練習を超えた本当のコミュニケーションが行われたことで、より主体的な活動参加につながったと言える。

非常に興味深かったのは、葛湯のトッピングの選択に文化の違いが現れていた点である。学生ボランティアは金平糖、学習者はナッツ等、自国にあるものを使用し、工夫して葛湯を作っていたが、和菓子のトッピングにナッツを使用するという学習者の発想は、学生ボランティアにとっても教師にとっても非常に新鮮であった。自国で入手しやすい材料を使用して作る和菓子というのは、まさに異文化接触の産物であるが、これも導入時の視覚・視聴覚資料によって喚起された結果ではないかと考える。

また、授業で使用した生教材には若者文化を紹介するものも多かったため、



図1 「インスタ映えする葛湯」の活動の様子

動画を見て話すことにより、学習者は動画で見た若者文化について学生ボランティアの意見を聞くことができ、学生ボランティアは学習者の反応を知ることができた。このように、特定の教科書を使用するのではなく、視覚・視聴覚資料を導入に多用することで、学生同士が若者文化を教え合うということが自発的に行われるようになり、さらにそれが若者文化の中に取り入れられた伝統文化への理解にもつながり、日韓双方の文化理解が促進されたと考えられる。

4.3 試み3「ICTの活用」の実践例と成果

4.3.1 実践例

4.3.1.1 実践例（1）ブレイクアウトルームの活用

4.1.1および4.2.1で取り上げた「伝統文化」や「和食」を紹介する授業では、いずれもZoomのブレイクアウトルーム機能を利用している。同様に、他のトピックにおいても、学習者と学生ボランティアとのグループワークの場として、ブレイクアウトルームは大きな役割を果たしていた。

ここでは、中級クラスが「伝統文化」のトピックで行った活動を紹介する。活動の流れは以下の通りである。

- (1) 学習者と学生ボランティアが日本の文化について話し合う。
- (2) 学習者を二人一組のペアにし、学生ボランティアの助けを得ながら、学んだ文型やスピーチの型を使って自国の伝統文化について発表する準備をする。
- (3) ペアごとにブレイクアウトルームに移動し、学生ボランティアや教師が各ルームを回って発表を聞き、質疑応答をする。

この活動では、それぞれのブレイクアウトルームを発表セッションの場として活用している点が特徴である。

4.3.1.2 実践例（2）Google Classroomの活用

教師と学生ボランティアの連絡ツールとしては、Googleの授業プラットフォーム

フォームである Google Classroom を利用した。当初は、運営担当教師から学生ボランティア全体に対し、Zoom 情報等の連絡事項を伝える場としての利用であった。しかし、次第に、授業担当教師から各クラスに配属される学生ボランティアへの事前連絡（次回の授業までに準備してほしいこと、持参してほしいものの周知等）にも使われるようになった。さらに、「ボランティア参加授業での工夫」というスレッドを作成し、学生ボランティア間で自由に情報共有や助言をし合える場を設けた。

4.3.2 成果

4.3.2.1 成果（1）ブレイクアウトルームの活用

ブレイクアウトルーム機能を利用した活動では、教師を介さず、学習者と学生ボランティアが自分たちだけで何とかしてコミュニケーションを図ろうとする様子が窺えた。

4.3.1.1 で取り上げた中級クラスの文化紹介発表活動では、各ブレイクアウトルームで学習者が自分だけの力で発表を成し遂げ、学生ボランティアからの質問に答えるという成果をあげた。これは、学習者にとって大きな自信につながったものと思われる。

また、上級クラスでは、グループごとに手話の歌を練習するという活動を行ったが、教師の役目は You Tube の手話動画の URL を Zoom のチャットに流すところまでで、その後の練習は学習者と学生ボランティアに委ねた。学習者らは、動画を画面共有し、再生速度を落としてゆっくり見るなどして練習を重ね、最終的には修了パーティーで歌を披露できるまでになった。

ブレイクアウトルームでは、2名から5名程度のグループで活動することが多い。10人以上が参加しているメインセッションでは、誰かが話していても、相槌をうつ、うなづくなどの動作はあまり見られないが、少人数のブレイクアウトルームでは、聞き手が相槌をうったり、うなずいたりしている様子が観察された。このように、ブレイクアウトルームでは、聞き手が「聞いている」というサインを出すことによって話し手も話しやすくなり、コミュニケーションが促進される側面もあると考えられる。

以上述べてきたように、ブレイクアウトルーム内での活動は、教師の目が届く中で行われる対面でのグループワークとは大きく異なり、学習者にも学

生ボランティアにも自立が求められる。その結果、試行錯誤しながらも、学習者と学生ボランティア主体で活動が進んだ点は大きな成果であると言える。

4.3.2.2 成果（2）Google Classroom の活用

まず、授業担当教師から各クラス配属の学生ボランティアへの事前連絡の場として利用したことにより、学生ボランティアは準備をして授業に臨むことが可能になった。対面時も含め、それまでは学生ボランティアの集合時間を授業開始15分前に設定し、そこで教師から当日の授業の詳細を伝えることにしていた。しかし、それを前倒しにし、当日は授業内容の最終確認にとどめることで、学生ボランティアも教師も余裕を持って授業に臨めるようになった。

次に、「ボランティア参加授業での工夫」というスレッド作成の経緯について述べる。第2章で述べたように、プログラム開始前には学生ボランティアを対象とした説明会を実施していた。しかしながら、対面ではなくオンラインでの説明会であったこともあり、特に1年生の学生ボランティアには不安もあったようである。そこで、情報共有の場として上記のスレッドを作成したところ、活発な情報提供が行われた。以下に投稿の例を挙げる。（いずれも原文ママ。下線は引用者による。）

・ 学生ボランティア A（初級クラス担当）による投稿

ジェスチャーや大きい手振りを積極的にすると、相手も話しながらジェスチャーをしてくれ緊張がほぐれたように見えました。

・ 学生ボランティア B（中級クラス担当）による投稿

話していて伝わっていないな。と感じたときは、チャットを使い、ひらがなで説明すると相手にうまく伝わりました。今日のトピックはアニメやマンガだったので、実際に手元にあったマンガを見せて話しました。話が盛り上がってよかったです。

・ 学生ボランティア C（中級クラス担当）による投稿

なるべくボランティアと話しているという感じではなく、日本の友達と話しているという雰囲気を作って、出てこない日本語があっても一緒に考えたり、調べながら話をしました！そして自分も実際に手元にあるものは

使っていこうと思いました！

- ・ 学生ボランティア D (初級クラス担当) による投稿

日本語を話すことにまだ慣れていない、自信がない人が多いと感じたので、なるべく間違いを指摘するのは少なめに肯定するような声掛けを意識しながら、簡単にゆっくり話しコミュニケーションをはかりました。

- ・ 学生ボランティア E (上級クラス担当) による投稿

A クラスでは文章を作成し、発表する授業だったので、チャット機能を使って文章を作っていました。また、オノマトペに関する授業だったので、ジェスチャーなどの動作で伝えていきました。

これらの投稿からは、ジェスチャーやフォリナー・トーク、レリアアの提示、Zoom のチャット機能の利用等、学生ボランティアが手探りで工夫を重ねながら学習者とコミュニケーションを図ろうと試みていた姿勢が窺える。また、C のコメント内の「自分も」という表現 (下線部分) は、直前に投稿された B の工夫を受けてのものである。このように、それぞれが実践した工夫をスレッドを通して共有し、それを参考にし合うことで、学生ボランティアの参加意欲を高める学びの場になっていたと思われる。さらに、それぞれのコメントには授業担当教師からの返信がついており、学生ボランティアと教師との交流の場としても機能していたと言える。

4.3.2.3 成果 (3) その他

本項ではブレイクアウトルーム機能および Google Classroom の活用の成果について述べてきたが、最後にその他の成果として、スマートフォン利用とオンライン授業自体による成果についても触れておきたい。グループワークでは、PC を Zoom に使用したまま、スマートフォンで画像等を検索し、それをメンバーに共有するような場面がよく見られた。学習者や学生ボランティアにとっては、最も身近で手軽に扱える機器であるためであろう。日本語の授業ではスマートフォンの使用を禁止するスタイルもあるが、本プログラムを通し、スマートフォンがコミュニケーションを促進するツールとして非常に有効であることを改めて感じた。

また、オンラインという授業形態による成果も大きい。Zoom 等の Web 会議ツールの使用は、学習者に自国、自宅、さらに言えば、自文化の中での受

講を可能にする。そのため、例えば、中級クラスで行った自国のものを紹介する活動では、学習者も身の回りのものを利用するなどして、積極的に自文化を紹介することができた。これは、来日型プログラムではなかなかできなかった活動であろう。その結果、学生ボランティアを通して日本文化を受信するだけでなく、学習者が自文化を発信し、それを学生ボランティアが受信するという非常に良い機会となったと考える。

本章では、(1) 日本文化を通して学ぶ日本語、(2) 視覚・視聴覚資料による導入、(3) ICTの活用という本プログラムの3つの新しい試みについて、具体的な実践例を紹介した上でその成果を明らかにした。次章では、これらの成果の支持的証拠として、プログラム終了時に実施したアンケート結果を提示する。

5. プログラム評価アンケート結果

本章では、プログラム終了時に学習者と学生ボランティアの双方に対して実施したアンケートの結果から、プログラム全体および協働学習に関する部分を抜粋し、対象別に報告する。

5.1 学習者対象アンケートの結果

学習者を対象としたアンケート調査では、参加者36名中27名から回答を得た。プログラム全体に対する評価は表2の通りである。回答は、「5：はい、とても」「4：はい」「3：まあまあ」「2：いいえ、あまり」「1：いいえ」の5段階評価となっている。また、それぞれの欄の数字は人数、括弧内の数字はパーセンテージを表している。

この結果からは、全般的にプログラムに対する満足度が高かったことが窺える。特に、学生ボランティアの参加については、ほぼ全員が非常に良かったと答えている。また、記述欄からは以下のような回答が見られた。(原文ママ。括弧内は筆者による補足)

- ・日本人と話せるという自信を得るようになった。
- ・お互い文化交流をしながらお互いの文化を理解することが良かったし面白かったです。
- ・討論を通じて現地の日本人に文化を聞くことができ記憶に残ります。

表2 学習者対象アンケートの結果

質問	評価	5	4	3	2	1
Q1-1 このプログラムに参加して、日本語の力が伸びたと思いますか。		16 (59.3)	9 (33.3)	2 (7.4)	0 (0)	0 (0)
Q2 このプログラムに参加して、日本の社会や文化に対する理解が深まりましたか。		17 (63.0)	9 (33.3)	1 (3.7)	0 (0)	0 (0)
Q4 授業の中で、日本語で話す機会が十分にありましたか。		19 (70.4)	5 (18.5)	3 (11.1)	0 (0)	0 (0)
Q7-1 授業に恵泉女学園大学の学生ボランティアが参加して、よかったと思いますか。		26 (96.3)	0 (0)	1 (3.7)	0 (0)	0 (0)
Q9-1 このプログラムに満足していますか。(内容・期間・費用など)		22 (81.5)	4 (14.8)	1 (3.7)	0 (0)	0 (0)

- ・ 個別のグループを作って恵泉学生と話したこと（がよかった。）
- ・ 日本の学生が授業に積極的に参加する方式がすごく良かったと思います。理解できない部分を詳しく教えてくれる役割をしてくれました。
- ・ 日本に関心が多いのもっと分かって行くために日本語勉強をもっと熱心にならなければならないと思いました。

これらの記述からは、学生ボランティアが参加するグループワークにより、文化理解が進むとともに日本語を話す自信もつき、それが今後の学習の動機づけとなったことが読み取れる。プログラムをオンライン化することで、従来のような学生間の交流ができなくなるのではないかと危惧していたが、予想以上の評価を得ることができた。一方で、以下のような意見も見られた。

- ・ 対面だったら、より多くのものを得ることができたかも知れない。
- ・ 残念だった点はただコロナ（コロナの誤植か？）の対面でプログラムを進められなかったのが、直接交流できなかった点です。しかし、仕方ない部分だと思います。

今後は、対面とオンラインのそれぞれの良さを生かしたプログラムを、ニー

ズに応じて並走させていくことも視野に入れる必要があるだろう。

5.2 学生ボランティア対象アンケートの結果

学生ボランティアを対象としたアンケート調査では、参加者45名中43名から回答を得た。プログラム全体に関する回答は以下の通りである。

Q1 ボランティアとして参加した目的・動機を教えてください。

(複数回答可)

- ・ 留学生とコミュニケーションを取りたかったため 38名 (88.4%)
- ・ 日本語教育に興味があったため 28名 (65.1%)
- ・ 留学生をサポートしたいと考えたため 27名 (62.8%)
- ・ 韓国(韓国語・韓国文化など)に興味があったため 19名 (44.2%)
- ・ 留学生の友達がほしかったため 16名 (37.2%)

Q4 機会があれば、また、ボランティアとして参加したいと思いますか。

- 5 (はい、とても) : 35名 (81.4%)
- 4 (はい) : 7名 (16.3%)
- 3 (まあまあ) : 1名 (2.3%)
- 2 (いいえ、あまり) : 0名 (0%)
- 1 (いいえ) : 0名 (0%)

Q5-1 今回、ボランティアとしてプログラムに参加してみて、どうでしたか。

- よかった : 43名 (100%)
- よくなかった : 0名 (0%)

参加目的に関する質問では、半数弱(44.2%)の学生ボランティアが「韓国に興味があったため」と答えている。今回のプログラムでは、学生ボランティアばかりが発信し、学習者が受信するという形ではなく、お互いに教え合い、学び合う場面がよく見られたが、学習者の国への関心が高かったこともその背景にあったものと推察される。

また、今回ボランティアとして参加したことについては、全員が「よかつ

た」と答えており、同様に、ほぼ全員が今後も「参加したい」と答えている。以下の記述回答からも、プログラムに対する肯定的評価が窺える。(原文ママ)

- ・ お互いの文化をシェアすることで、日本の文化にも改めて気づいたり、韓国の文化を新しく知ることができました。また、韓国の学生さん達がすごく日本語が上手で、私も言語学習を頑張ろうと刺激になりました。
- ・ 個人的に韓国の学生たちと交流するのは今回が初めてだったため、韓国の文化について韓国の人から直接教えてもらえたことが何より嬉しかったし、楽しかった。
- ・ 自分が想像していたよりも、ボランティアが主体となって授業を進める形だった。そのため、自主的に物事を判断したり、呼びかけを行う、話をまとめるなどの新しい力が身についたと思う。
- ・ 国が違い距離が離れていても、楽しくお話ができ、とても嬉しく思いました。
- ・ コロナで直接は会えないながらもオンラインというまた新しい形で挑戦できたことはとてもよかったと思います。
- ・ 対面ではなかったがその分留学生と濃い時間を過ごせた。
- ・ オンラインにおいては今まで以上に交流が難しく感じられましたが、会話などにおいて分かり合えたときの感動はひとしおでした。
- ・ 海外で日本語母語話者の学生と話せる、このプログラムはオンライン授業の利点が生かせると思います。

これらの記述からは、学習者との交流を通して異文化理解が進むと同時に言語学習に対する刺激を受けたことや、主体的にボランティア活動に参加できたこと、オンラインにはオンラインなりの利点があったと評価されていることがわかる。しかし、一方では、学習者同様、対面でのプログラムに対する期待の声もあり、ニーズによって授業形態を選択していく必要があると思われる。

6. まとめと今後の課題

本研究では、交流型日本語短期プログラムのオンライン化に際し、オンラインであっても異文化理解や交流が期待できるのか、また、学習者の主体的

な学びが達成できるのか、という課題に対し、(1) 日本文化を通して学ぶ日本語、(2) 視覚・視聴覚資料による導入、(3) ICTの活用という3つの試みを取り入れることで、十分な成果があがることを報告した。さらに、オンラインならではのICTの活用と学生ボランティアの参加により、学習者と学生ボランティアの主体的な協働学習が可能となることを主張した。

より詳細に言えば、来日して日本文化に直接触れる機会が得られない学習者にとって、学生ボランティアが従来の文化体験や課外活動に代わる「日本語・日本文化理解の最大のリソース」となったのである。同時に、学習者が自文化内からプログラムに参加したことも相まって、学生ボランティアにとっては学習者が「韓国文化理解のリソース」となった。これは、オンライン化の副産物であると言える。

来日型対面プログラムでは、学習者がその場で自国の事物を見せながら紹介するというような活動は難しい。しかし、オンラインプログラムであれば、身の回りのものを利用して自文化を紹介する、自宅にある材料でお菓子をトッピングして見せるといった活動も可能となる。このように、自文化内からお互いの日常をそのまま紹介し合える点は、オンラインプログラムならではの利点であろう。

また、来日型プログラムにおける交流の際にやりとりされる情報は、一般的に日本に関するものが多く、日本語ボランティアが学習者に日本について紹介する割合が多い交流になりがちである。一方、オンラインプログラムの場合、学習者も日本語ボランティアも等しく自国からの発信となるため、お互いに自国について紹介すると同時に相手の国についても学ぶことが容易になる。オンライン環境が双方向的な情報交換を促進する要因となったと考えられる。

以上のように、オンラインという制限のある学習環境の中で、学習者と学生ボランティアが自ら方法を模索し、工夫をしながら主体的に学習活動に参加し、学び合う姿勢が見られたことが、本プログラムの最大の成果である。本研究により、オンラインプログラムの有効性が明らかになったと言える。

一方で、アンケート結果からは、オンラインプログラムに対する満足度は高かったものの、対面プログラムへの期待も窺われた。今後は、対面とオンラインのそれぞれの良さを反映したプログラムを、ニーズに応じて準備し、学習者にとっての選択肢を増やしていくことも検討していきたい。

注

本稿は、第57回日本語教育方法研究会（2021年9月12日（日）オンライン開催）においてポスター発表した内容に、大幅に加筆修正を施したものである。

参考文献

- 秋元美晴・島崎英香・井口祐子・古田島聡美・武田知子（2020）「交流型日本語短期プログラムにおける学習者の日本語発話力の変容—2018年度恵泉女学園大学サマープログラムから—」『恵泉女学園大学紀要』32巻, pp. 17-45
- 小野里恵・上原真知子・島崎英香・志賀里美・栗田奈美（2021）「交流型日本語短期プログラム・オンライン版の試行—文化紹介から始まる協働学習の効果—」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 28, No. 1
- 許明子・謝カン月（2021）「オンライン日本語授業における協調学習の試み：—中上級レベルの『日本語コミュニケーション論』のグループ活動の事例を通して—」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 27, No. 1
- 久保一美・奥村由美（2021）「オンライン型学外活動の可能性と分析」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 27, No. 1
- 長谷川由香・村田晶子・池田幸弘・竹山直子（2021）「短期文化体験プログラムの実施と教材開発のプロセス—オンライン時代を見据えて」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 27, No. 1

引用資料

- 国際交流基金「ひろがる もっといろんな日本と日本語」<https://hirogaru-nihongo.jp/>
- 「まるごと+（プラス）入門 A1」<https://a1.marugotoweb.jp/ja/>
- 「まるごと+（プラス）初級1 A2」<https://a2.marugotoweb.jp/ja/>
- 「まるごと+（プラス）初級2 A2」<https://a2-2.marugotoweb.jp/ja/>
- 「エリンが挑戦！にほんごできます。」<https://www.erin.jp/f.go.jp/>